

## 大家族のような一体感だった

～懐かしい30年前の日々～

日本人学校卒業生 遠藤 茂樹

みなさん、おはようございます。卒業生第1号の遠藤です。

今はイギリスにあるHondaの欧州本社に二度目の駐在をしています。

さて、学校創立から今では30年。当時14歳だった私も44歳です。中1の娘と小5の息子がおります。本来なら、ご父兄の皆様と同世代なわけですが、どうしても生徒側の視点に立ってしまう自分がいます。先ほどから生徒さんの顔を見ていると、30年の時を越えて、ついつい昔の自分達とダブります。

30年という時間は、子供が親に、少年がオジサンになるのに十分な年月ですから、本当に長い時間です。でもウイーンという街は30年を経てもあんまり変化ないようですね。今朝もU-Bahnで”Umsteigen zur Linie acht und zwanzig”のアナウンスの人って昔と全然変わってないんですけど一体どんな人がやってるんでしょうね。  
(笑)



日本人学校第1回目の卒業式(1979年3月)

さて、日本人学校設立の1978年と言えば、私の世代にとっては、「ザ・ベストテン」の放送開始だとか、キャンディーズの解散などが、懐かしい思い出です。それから先々週、無期限休止の前のラストコンサートを開いたサザンオールスターズが「勝手にシンドバッド」でデビューしたのも78年の夏でした。映画では最初のスターウォーズが公開された年です。また、スペースインベーダーが大流行した年でもあります。翌、79

年にはガンダムのファーストシリーズの放送が始まっています。

開校当時の日本人学校はまだ仮の校舎でとても狭くて、休み時間に机をくっつけて楽しんだ卓球は、なにしろ台から窓際まで1m位しかないものだから、しょっちゅうボールは窓から落ちていくし、後ろに下がるスペースがないので、勢い、前のめりになって、スマッシュばかりの異様に攻撃的な卓球スタイルになっていました。今のこの広々した大きな校舎とはえらい違いです。更衣室なんてものも当然なくて、女性の先生が教室のドアを引き込んだ影で着替えされていたのを、おませだった私は覚えております。

小学校から中学3年まで合わせて30人程度の小さな学校は、大きな家族のような

一体感がありました。学校に行くのがすごく楽しくて、土日の間、「ああ、早く月曜日にならないかな」って思っていました。月曜日を心待ちに過ごす週末は、44年の人生である時だけです。79年の夏、中学部の生徒全員が毎日午前中、トゥルケンシャンツパークに集まって喋ったり散歩したりして昼に帰宅するまで過ごす、という時期がありました。学校がない時に毎日中学部の生徒のほぼ全員が集まっていたのは、ある意味普通じゃないのかもしれませんが、でも、それ位仲良しでした。

また小学校の1年生や2年生とも良く遊びました。私はもう身長が170cmあったので、彼らの教室に行くと親戚の兄ちゃんみたいな感じで、子供達がよく登って来るんですね。小2に陽子と千昌と美幸という三人娘がいて、ある日、陽子と美幸に「遠藤君はチーちゃんのほうが好きなんですよ」と詰め寄られました。小2とは言え、3人の女性に一度にもてたのは人生である時だけです。(笑) そんな風に小1から中3までが皆、喧嘩したり遊んだり、仲良く団結した学校でした。

さて、一方、時に、いじめに合うこともありました。いえ、日本人学校の中ではなくて、街中とかスキー場で人種差別や偏見にあうことが時々ありました。大人と違って子供の世界は残酷です。外見が違っていると、見下したり、排除したり。露骨にと罵声を浴びせられたり、逆にベトナムの難民と間違えられたこともあります。通学途中で会った地元のおばさんが、我々10人くらいの集団に一人ずつお菓子とお金をくれるの



開校から間もない日本人学校の1979年当時校舎

です。お金は要らないって言ったのですが、私のドイツ語では通じませんでした。

そうした外の風にさらされる共通体験があるので、日本人の子供同士はさらに連帯感が強くなったのだと思います。私にとっては、あの頃人種偏見へのリアルな経験をしたことが、今の自分の世界観を造るのに役立っていると思います。大人になってから会社の金看板をしょって海外駐在しても、容易にはわからない部分です。子供の頃に海外で揉まれているこの生徒さん達は、きっとバランスの取れた国際感覚を自然と身に付けていけることでしょう。ただ、その為には、みなさん、街で、旅行先で、色々なリアルな経験をして下さいね。家でテレビばかり見てちゃ駄目だよ。

そういえば、みなさんは、おうちで、日本のテレビ見られますかあ？ おじさんも今ロンドンで暇な時は日本のテレビに見入ってます。でも30年前はロケフリもJSTVもなく、ビデオも普及してませんから、TVはドイツ語のみです。そうそう、紅白歌合戦を映画FILMに焼いたものがJAL協賛で日本大使館が上映するのですが、ロンドンを皮切りにパリ、デュッセルドルフと各都市で日曜日ごとに上映しながらFILMが西から移動してくるものですから、一番東のウイーンにつくのはなんと3月でした。信

じられますか？毎年3月に市内の映画館に日本人が子供も大人も集まって、紅白歌合戦を鑑賞するんですよ？当然、赤組が勝ったか白組が勝ったかはわかっているんですが、でも最後まで観るんですよ。今では考えられませんね。

そんな風に、ネットもeメールもないので日本の情報が少ないから、新しい転校生が日本からやって来るともう大変な騒ぎです。小学生から中学生まで転校生を囲んで、「今なにが流行っているの？宇宙戦艦ヤマトの映画観た？どうだった？」てな感じです。もう、その転校生の家へ友達を招こうものなら、マンガ本やらカセットテープやら、「借りていい？貸して、貸して」と盗賊の集団みたいなもんです。日本の最新情報にみんな飢えていました。マスメディアから得る情報が少なく、友達と話すのが最大の娯楽という点では、ラジオやテレビが普及する前の子供達の過ごし方に近かったのかもしれませんが。また、人数が少ないので、学年の差を越えて小さな子も大きな子も一緒に遊んでたのも、昔の子供達の遊び方に近かったと言えますね。Always三丁目の夕日じゃないですけど、あの頃の記憶はほのぼのとしていて、でも思い出すと哀ない感じがします。

さて、先ほど藤原さんのお話に出てきた立岡校長ですが、私に油絵をやらないか、と誘ってくださいました。でも、英語の勉強で忙しいのでお断りしたのですが、妹が興味を持って、絵をはじめ、それをきっかけに帰国後は多摩美術大学に進み、絵画からワイヤーアートに転向して、今では本も出してますし、TVや雑誌にも時に取材を受けており、そこそこ成功しております。これも立岡先生のお声掛けがきっかけなんですよね。私もそうですが、人生って些細なきっかけで大きく変わっていくものです。

皆さんは、30年後、自分が何をしているか、想像がつかますか？こうなりたい、ってヴィジョンを持っている人、素晴らしいです。まだよくわからない人、それでいいんです。

実は皆さんの前には無限の選択肢があって、毎日、知らず知らずに様々な選択を自らしているんですよ。今日の些細な経験が、未来の自分を支える糧となることもあります。たとえば私のスピーチを聞いて、「おじさん、案外面白いなあ」と思った人、明日から人生変わるかもよ。(笑) まあ、変わらないでしょうけど。

今、WIENで小学校、中学校の多感な時期を過ごす皆さんにとって、未来は無限大の可能性です。そしてその選択は、貴方たちが自ら決めて、勝ち取っていくんです。だから今、精一杯、嫌なことも、楽しいことも、恥ずかしいことも目を見開いて観察して、体験して下さい。そして、もしかしたら、30年後、ウィーン日本人学校の創立60周年記念に参加してくださいね。ご静聴ありがとうございました。

\*2008年8月30日に日本人学校創立30周年記念式典で、遠藤茂樹さんは藤原美穂さんとともに「私と日本人学校」をテーマに講演されました=写真。

